
月夜ばかりと思うなよ

ケヴィン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜ばかりと思うなよ

【Nコード】

N33330

【作者名】

ケヴィン

【あらすじ】

つきみや しんや
月宮深耶は、7歳の時に勘違いにより殺されてしまったが、吸血鬼となり生きながらえた。

家族も記憶も失い、心が空っぽのまま、少年は裏の世界で生きていかなければならなかった。

そして、十年の時が経ち・・・

少年の心は空っぽのままだった。

そんな時、とある事情で故郷である日本の北国、ますみちよう間住町へとやってきた。

少年に、転機が訪れる・・・

プロローグ（前書き）

このお話は吸血鬼モノですが、世間一般的な吸血鬼モノからは外れています。

苦手な方はバックで戻ることをオススメします。

好きな方は、駄文ではございますが、できましたら長い目で見ていただけたら幸いです。

プロローグ

カーテンを締めきった暗い室内のなかで、携帯電話のディスプレイのみが光源となっていた。

携帯を操る指が、数の多い着信履歴の中から、一つの名前を選び出した。

そこには只一文、『サンタ』という文字。

文字を確認すると、すぐにコールする。

相手を待つ間、携帯の主はタバコを取り出した。

口にくわえると、直ぐに火が点く。

だが、一瞬明るくなった室内で、タバコを吸っているこの人物は、ライターを持っていなかった。勿論、この人物に火を点ける別の人物もいない。

だが、今現在此処には、その疑問を見た者、問い質す者はいない。

この人物が謎の火元でタバコを楽しむこと十数秒。電話先の相手が出たようだ。

「よう、サンタ。調子はどうだ？」

どうやら、この人物は男のようだ。

『――！？』

電話先の人物も男の様だ。

「そう切れるなよ。カルシウムが足りてないぞ？今度寿司でも喰うか？」

『――！』

「おー、耳がいてえ。分かってるって、苦手なんだろう？」

『――？』

「あつ、忘れてた。上からの命令なんだが、次の仕事が決まったぞ？」

『――』

「分からんでもないが。でだ、次の場所な、日本だ」

『――？』

「だから日本だよ日本。そつだ、今度寿司でもどうだ？奢るぞ？」

『ピッ、シーッ』

「あつ、切られた。故郷が仕事場に成るからって八つ当たりか？」

男は携帯を閉じると、ポケットに入れ、タバコの吸い殻をポイツと捨てる。

すると、謎の火元で点いたタバコは、地面に落ちるまでに、一瞬で鮮やかに燃え尽きた。

鮮やかに燃えたタバコの炎に、男の姿は映らなかった。

カーテンを締め切った暗い室内に残るのは、タバコの臭いと灰のみだ。

第一部・第一章へ曇天の空編（前書き）

月二回の投稿にしようと思う今日この頃

仕事の暇な時間に書いて（打ち込み？）せいか、かなり誤字脱字の駄文になってしまうと思いますが、見つけて報告していただけたら幸いです。

第一部・第一章へ曇天の空編

雪国の冬休みは長いが、夏休みは短い。冬の悪天候により登校の不便さを緩和する措置だろうけど、それでも夏休みの長い学校を羨ましいと思う。

同じ日本でも、南の暑い街に比べればマシだろうけど、8月の半ばに登校するのは辛い。

・・・尤も、一番辛いのは、学校の長い坂道だけだ。

帰りは自転車に乗るものは楽ができるが、朝登る者は汗だくだ。一部の馬鹿を除けば、全員が自転車を押して登る。いつもは仲の良い教師と生徒も、クーラーの効いた車に乗る教師に対しての視線は、決して友好的なものではない。

今日も青春とは程遠い汗を流す生徒を大量生産している。

教室で行う久しぶりのホームルーム前、一月振りのクラスメートの中である噂が流れていた。

転校生が来ると

というか、クラスメートに一人、転校生の従兄弟がいて情報を流している。

朝のホームルーム。

噂の転校生が紹介された。

私立間住ヶ丘大学ますみがおか付属高校の夏制服を着た、ちょっと硬くなっている黒髪黒目の男子。

「転校生の月宮深耶つきみや しんやです。宜しくお願ひします」

当たり障りのない挨拶で彼は現れた。

今日は始業式のみで終わった。

回収された夏の宿題は担任教師の宿題だけで、何人かは安堵している。

私たちー橘霞はなみは帰り支度を始めた。といっても、持ってきた宿題を机の中に仕舞うだけ。

軽くなった鞆を手に教室を出る。クラスメートからの質問の嵐を受ける転校生を横目にしながら帰路につく。

廊下には、早く終わったことを喜び、帰りの予定を立てている生徒が壁を作っている。

間に割って入る程、無粋ではない私は、T字路になっている廊下の比較的空いてる方を選んで進む。

この学校、大学付属の影響か、相当入り組んでいる。新入生と文化祭の客を惑わす迷路だ。

「きゃっ！！」

「ッ！」

叫び声が聞こえた。友達同士でのじゃれあいであげる声の大きさではない。

声の聞こえた方に走りだす。階段を昇り、廊下の左右を確認する。そこには、掃除用具を投げ出し、慌てる女子一人と、おそらくクラスメート数名。

「いたのよ、あそこに！ホントに見たんだってば！」

「屋上は立ち入り禁止たぜ？人がいるわけないって」

叫びながら、隣の校舎の屋上を指差す彼女。彼女のクラスメートは、常識的な判断をしている。

・・・ちよつと聞いてみよう。

「すみません。何かありましたか？」

一番近くにいた男子に話しかける。

自分で言うのもなんだけど、私はそれなりには美人だ。そんな女子に話しかけられて話さないなんて男子はいないと思う。

「えっ、あっはい！その、うちの女子が屋上で人を見たって言うんですよ。屋上、立ち入り禁止なのに」

・・・ふむ、成る程ね。

「屋上なら、さっき番長グループが入らないで揉めてるのを見たわ。それじゃないかしら？」

「えっ、そうなんですか？」

「そうよ。だから早く伝えてあげて。それと、他言無用ね」

「わ、わかりました・・・」

そう言っただけはクラスの輪に入る。

因みに、番長グループとは、この学校の不良グループの集まりであり、彼等の総称である。噂にされるのを嫌い、噂を流した人物は執拗に追いかけられリンチされるので、基本的に無視される。

ようやく騒ぎは収まり、個々に掃除を再開する。

それを見届け、屋上に向かいに歩きだす。

なにしろ、屋上に番長グループが云々は嘘なのだから。

気になることは確かめなくなる私クオリティ。

殆どの学校は屋上は立入禁止になっている。この学校も例外にはなれず、多数ある屋上は開かない。

屋上に出るドアの前で困り果てる。

気になって来てみたが、もう手詰まりだ。

と、

「あれ、橘？こんなところでなにしてんだ？」

階段を上がってきたのは、クラスメートの北里真人^{きたざと まさと}だった。

見た目身長共に平均値にいるクラスメートだ。

「北里君？貴方こそどうしたの？」

「俺？久し振りに屋上に上がりたくなつてな」

は？

「ちょっと待つて。屋上は閉鎖されてるはずよ。なんで北里君が入れるの！？」

「ああ、それか？それはな・・・」

皆には言つなよ？みたいな仕草でドアノブを動かす。すると、

ガチャッ

アッサリとドアが開いた。

「・・・なんで？」

「右に二回、左に三回回して、後はノブを奥に押し込むようにすると開くんだ。壊れてるんだ」

何でもないように言ってくれる。私は此处で5分はロスしているのに。

「まったく、開けられるなら、さっさと来なさいよ。使えないわねえ」

「ひどっ！折角開けたのに！」

理不尽なことを言っただが、特に傷ついていないようだ。顔がニヤついている。

お互い塾が同じなせい、この程度の罵りあいには日常茶飯事だ。

「で、橋は何で屋上に？」

私は屋上に出るドアを押し開ける。

「掃除してた生徒が、屋上に不審者を見たそうなの。気になって確かめに来たわ」

「・・・相変わらず行動力あるなあ」

屋上の空は快晴。室内とどちらがマシか分からない暑さは、フェンスの無い高い場所からの風景で、気分は割と爽やかだ。

「・・・誰もいないな」

「言わなくても分かるわ」

遮蔽物の殆ど無い屋上の死角を探すが何も無い。

「結局、見間違いか・・・」

「なあにガツカリしてるんだか。何も無くて良かっただろ？」

そういう問題じゃない。

「・・・あつて欲しかったの・・・」

それは、北里には聞こえない声で呟かれた。

「そろそろ戻るわ。まだ昼前だし」

「お、それじゃ、一緒にどこか飯食いに行くか？」

「遠慮しておくわ」

出口へ向かい歩きだす。

と、

《それ》とバツタリ出くわした。

「……で、此处が屋上！立ち入り禁止の場所だから、深耶もあまり近づかないほうが良いよ？」

「……つーか開いてるぞ？立ち入り禁止じゃないのか？」

「あれ？おかしいなあ」

偶然にも、普段は人のいない屋上は賑わいはじめた

北里Side

煙と馬鹿は高いところが好きと言うが、修学旅行やデートで東京タワーの展望室に行く奴まで馬鹿とは言わないんじゃないか？

俺にとって屋上からの風景は、ちょっとした観光みたいなものだ。

イジメで人が飛び降りるかもしれないから、と、そんな理由で閉鎖されるのは筋違いだと思う。

一部のイジメられて飛び降りた人物のために、この場所は存在意義を封じられたのだ。

大人も大人で、そんなに飛び降りされたくなければ、高い校舎なんて作るな！って日々思う。

・・・まあ、そんなことされたら此処からの風景を見れなくなるから言わないけどな。

だから、クラスと塾が一緒の橘が、屋上に入ろうとした時は、嬉しくなった。

何か別の理由があって入るみたいだけど、構うもんか。

今は気分が良い。

なんせ・・・

「おい、パン買ってきたぞ。好きなもの選べ。そして金払え」

「ありがとう、深耶！橘さんは何食べます？」

「霞で良いわ、月宮さん」

「それじゃ、私も姫識ひめりで良いです！よろしく願いします！」

「宜しくね。あ、転校生、そのサンドイッチ取って。」

「何で姫識は名前で俺は転校生なんだ？異議を唱える！そして金払え！」

「金金金金煩いわね。はい百円」

「足りねえ！」

「深耶落ち着いて！下に聞こえちゃうよ！」

今日の屋上は賑やかだ。

「おい、北里！コイツになんとか言ってやってくれ！」

「良し分かった！そのチキンカツを百円で頼む！」

「何が良しだ！足りねえ！鬼かお前等！」

「だから深耶、聞こえちゃうよー！」

第一部・第一章へ曇天の空編（後書き）

2010.11.28

文章を一部変更いたしました。

第一部・第二章へ曇天の空編（前書き）

・・・年末の仕事の忙しさは異常。師走とか誰が名付けたんだピツタリすぎ。

基本、現在書いてる作品は、昼の時間に書いてるせいか全然進みません。なのでここで改めて謝らせていただきます。

本当にすみません・・・。

第一部・第二章へ曇天の空編

??? Side

『・・・トナカイ・5からソリ・1へ、定時連絡。サンタは現在予定コースを外れ、友人2名とお姫様と歩き回っている。どうぞ』

『ソリ・1、了解。予測進路に障害無しだ。友人二人はこれより、フレンド・1と2とでも呼んどけ。どうぞ』

『男と女、どちらを1にする？どうぞ』

『男を1にしろ。どうぞ』

『了解』

『ーートナカイ・3から各隊員、聞こえる？』

『トナカイ・5、良好』

『ソリ・1、聞こえている』

『サンタはまた予測進路を外れ、別方向に進行。トナカイとソリの応援を求む。どうぞ』

『・・・またかよ、こっちは土地勘無いんだぞ？。先回りにだって時間が掛かる。』

ソリの応援はどうなってんだ？。どうぞ』

『まだ開店休場だよ。諦める』

『いやいや待てよ。サンタは女二人とデートだろ？。可笑しいだろ？俺らはこれであいつはあれだぞ？』

『諦める。それに、あれはダブルデートだろ。サンタはお姫様に夢中だ』

『それはそれで腹立つな。・・・ところで、フレンド・2についてお前、どう思う？』

『美人ですね。他の女子より数段大人びて見えます。正直、今からでも充分食べ頃――』

『そんな話じゃない！。さっきの屋上のこととか、興味本意でやることじゃない。・・・気になるな』

『ロリコンがでたぞーっ！。トナカイ・2は逃げろっ！』

『そりやてめえだ！いいからフレンド・2の資料をさっさと探せ！。ついでにフレンド・1の方もだ！。交信終わる！』

『りょーかい。交信終わる』

平日ならまだ椅子に座って欠伸の出る授業を聞いている時間帯、私たちは間住町を歩き回っていた。理由は、今日転校してきた、月宮深耶の案内だ。

話を聞くと、五日前から来ているのに、未だに町中をともに歩いていないそうだ。何をしてたんだか・・・。

あ、従兄弟兼幼なじみの月宮姫識ひめりが何もしてなかった訳ではないらしい。日常生活に支障のないように、学校までの道程や、スーパー、コンビニぐらいは教えていた。私たちが回るのはそれ以外の嗜好品を売っている店や、娯楽施設を回ったが、学校付近のゲームセンターは、生憎新規入れ替えの貼紙をされお休みだったので、観光地、有名所を歩いたりした。

そして今は、休憩を兼ねて、カフェで一休み中。

「ーで、ちょっと遠いけど、橋を越えた北間住にラーメンの美味しい店があるわ。学生にも良心的だし。休日の学生が買い物帰りに寄るには良いわよ」

「ニンニク入りが旨いな。チャーシューもだけど、あの値段で何で旨いんだか」

「女の子にはちょっとキツいかな。今度食べに行こう、深耶」

「ああ、案内頼むよ」

私たちの通う私立間住ヶ丘大学ますみがおか付属高校の生徒も、何人かいる店内は、それなりに大入り。四人掛けのテーブルを占領できたのは幸運

だったりする。

「行けなかった場所も多いけど、この町は気にいったかしら？」

「・・・その台詞、この前姫識にも聞かれたよ。・・・今までいた場所より治安も良いし、安心できる場所と言っておくよ」

「可愛い彼女と同棲なら、どんな場所においても良い場所でしょうね」

ヴフッ！

窓際に座る月宮性二人が吹き出す。カップの中身が空になって良かった。てゅーか姫識、貴女確か不特定多数の男子にラブレター貰ってなかったっけ？割と有名よ？耐性無いの？

「か、かすみ」

「橘！」

「あゝはいはいごめんなさいでした」(棒読み)」

「ごちそうさまでした」(棒読み)」

さっさとくつつけアベック予備軍。

「そーいえば月宮、帰国子女ってホントか？全然そーいう風に見え

ないけどさ」

「あれ？そうなの？」

「教室で質問責めに遇ってた時、霞だけ先に帰ったからね」

「興味無いことには見向きもしない私クオリティー。で、どうなの？」

「・・・そうだよ」

さっきのこととか、今の興味ない発言のせいとか、ぶっきら棒に返してくる。

「英語ペラペラなの？テスト楽そうね」

「話せることと書けることは別物だ。英語だけじゃなく、他にも複数喋れるが、テストに応用出来ないな」

中国語とかな、と、最後に付け足す。

「・・・何処の国にいたのよ」

「世界中いろいろ。エジプトのピラミッドに上ったりしたな」

「いつから？」

「十年前・・・かな？」

「勉強は？。どうしてたの？」

「・・・教室の続きかよ。してたよ。言葉は自然と覚えたし」

「・・・なあ、深耶。お前――」

北里が、なんで外国にいたのか、聞こうとした時。

「すみません！店員さん！」

窓際に座っていた姫識が、まるで、これ以上話をさせないように割って入った。

いや、確実に話題を終わらせようとした。

お代わりの注文を受けに店員が来た。全員でアイスコーヒーを頼む。店員が注文を取り、オーダーをしに離れると、気まずさだけが残る。

「・・・えーと、さ・・・」

最後に地雷を踏んだのは北里だけど、踏みかけたのは私も同じだ。私クオリティーが疼きすぎた。

無言のままに時は流れる。そうしている内に、コーヒーが人数分配膳された。

空気を読んでか、店員は早々に退散する。

配膳されたアイスコーヒーを誰も飲まず、机の上でオブジェになっ

てゆく。

修復不可能まっしぐらな空気を破ったのは、深耶だった。

「あゝ……。姫識」

一段と気まずそうにしている姫識。

「教室の時もそうだったけどさ、あんまり気にすんな。大したことないんだ」

「でも、だってあの話は……」

二人を余所に、正面の北里にだけ聞こえるように尋ねる。

（教室の時のことって分かる？）

（ああ、橘が帰った後で、質問会が白熱してな。さっきの橘みたいに転校前のことに話題が移ったら、急に月宮さんが学校の案内をする、この後用事があるから帰らなきゃって、深耶のこと連れ出してな……。）

……。つまり私は地雷を踏んだ訳か……。って、北里君？、教室で地雷だって解ってたでしょ？。何で再度踏んだの？。しかも雰囲気からして相当な内容のプライバシー。まずいわね……。

（……。余計聞きたくなってきたわ……。）

（うわ、鬼畜！）

それが橘クオリティー。連帯責任であんたも同罪よ。

でも、このままだと聞けそうにないわね。転校生なぜか押されはじめる。姫識に甘すぎだわ。ならば……。

「ねえ、姫識、深耶君。私も北里君も、無理に話を聞こうとは思わないわ。プライバシーを根掘り葉掘りしなきゃ友達になれない訳じゃないわ。ゆっくりと、互いを理解しあえば良いと思うわ」

ポイント1。さっきまで転校生と呼んでいたのを名前で呼ぶ。態度の変化に友好度、好感度がアップ。これが世にいうツンデレ効果か。それ、絶対違うと心を読んでくる北里君の無言の訴えには、ちょっとお前黙れ的な殺気を視線も合わせずに送る。

月宮姓の二人は、意見の言い合いを止め、お互いの顔の変化と、ちよつとした身振りだけで目に見えるけど聞けない何その熟練夫婦的な技を数秒行い、ようやく話し（？）が終わる。

「……先に言っておくが、聞いて楽しい内容じゃないぞ。それでも聞くか？」

「さっきも言ったけど、無理に聞き出そうって気はないわ。友人としても、話しづらいことは聞かないし、聞いたとしても、他の人に話さないわ」

ポイント2。友人の部分を少し強調する。気づかないようにさりげなく、本人との距離を縮める。

お互い、最終確認を済ませる。

深耶は、アイスコーヒーを少し口に入れ、何かを考え始める。それは、話すか話さないかではなく、何処から話すか、何処まで話すかを考えている。

その様子を見ながら、私は確かな手応えを感じ取った。

この時のことを北里は、しばらくこの内容を聞いたことを若干後悔するわけだが、それはまた別の話し。

第一部・第二章へ曇天の空編（後書き）

未だに吸血鬼の一人も出て来ないのかと思われてそう・・・。

力不足ですみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3333o/>

月夜ばかりと思うなよ

2011年1月27日17時45分発行